

学習院アーカイブズ ニューズレター

26

Gakushuin Archives Newsletter 2026.2.17 vol.



体育実技 ダンス履修者有志によるギリシャの民族舞踊（1992（平成4）年10月25日）

学習院女子短期大学第23回和祭、中庭での風景。田中イチ子教授がダンスの授業の中にギリシャの民族舞踊を取り入れたことから、その成果を発表する形で行われた。（学習院アーカイブズ蔵）

Contents

『戦時期の学習院-旧制高等科の記録と記憶-』（東洋文化研究所・調査研究報告78）の編集を終えて

学習院大学文学部教育学科 教授 梅野 正信 …………… 2

安倍能成と学習院「教育委員会」

学習院アーカイブズ 桑尾光太郎 …………… 4

受け継がれる学習院女子大学の記録 — 資料移管の概要 —

学習院アーカイブズ 小根山美鈴・高田 礼子 …………… 6

主な活動（2025年7月～2026年1月）

…………… 8



『戦時期の学習院 —旧制高等科の記録と記憶—』

(東洋文化研究所・調査研究報告78)の編集を終えて

学習院大学文学部教育学科 教授 梅野 正信



詠み人の知れぬ碑

学習院ミュージアムから北一号館に目を向けると、教育学科の書庫（二階）から見下ろすあたりに、「出陣の碑」がある。1944年10月頃、卒業を控え、学徒として戦場に赴くことになる、旧制学習院高等科文科2年の学生から、「目白ヶ丘の櫻と咲かむ」を下の句に和歌を詠じようと声が上がり、教員に託して入賞したとされる。その後、天覧台の西二号館寄りに山梨勝之進院長（当時）揮毫による石碑がおかれ、碑を囲んで三本の桜の若木が植えられたという。碑は、戦後、北一号館竣工（1960年）にともない、現在の場所に移設された。説明板には、「御国守り 南のきはに 身はすて、 目白ヶ丘の 櫻と咲かむ」と、「春されば めぐし乙女ら かざすてふ

目白ヶ丘の 櫻と咲かむ」の二首が紹介されている。（『学習院百年史 第二編』（1980年）及び瀬川昌治「目白ヶ丘の櫻と咲かむ—出陣の詠章—」（『学習院広報』2000年：瀬川氏は1945年高等科卒）。しかし、いまに至るも、「出陣の碑」の正確な位置を教える記録は確認できず、説明板にある二首の歌人、そして他の多くの学徒による歌も、説明がなされないままにある。これは、どうしたことだろうか。アーカイブズをたずね、桑尾光太郎氏に教えを乞うたのは、2021年であった。報告書前半の100頁は、アーカイブズと史料館の貴重な資料を提供いただいたものである。

報告書後半の300頁は、戦時期の学習院に在学された方、あるいはご家族からの提供資料による。桜友会の東園基政会長（当時）に研究の主旨を説明したのが2023年6月、了承を得て400をこえる方々へ調査の願いを送る。しばらくして25通近くの返信が届き、それから二年をかけて本報告書への掲載となった。個々にお名前を出す紙幅はないが、学習院への深い思いに触れることができた。心より御礼申

上げたい。

目白ヶ丘の櫻と咲かむ

百年史と説明板に紹介される二首の作者は誰なのか。報告書にはアーカイブズの許しを得て『輔仁会報』2号の全文を翻刻したが、ここに瀬川昌治氏を含む9人のお名前と15首の歌が記されていた。これにより「御国守り」が瀬川昌治氏の歌であることが判明した。（報告書84頁「目白ヶ丘の櫻と咲かむ—出陣の詠章—」）。しかし「春されば」の方は見当たらない。他日（2025年10月下旬）のことになるが、あらためて桑尾氏と『清水文雄「戦中日記」文学・教育・時局』（笠間書院、2016年）を確認すると、1945年1月10日の項に瀬川氏の11首が書き留められていた（459～460頁）。「春されば」も、瀬川氏の作であったのである。おそらくは、児玉幸多氏（『学習院百年史』編纂時の学長）が、親しくする清水文雄氏から提供を受けたのではないかと、これは桑尾氏と筆者の推測である。

「出陣の碑」の正確な位置は、残念ながら、確認できなかった。施設課に無理をお願いし、図面など探してもらったが、結局のところ、アーカイブズ所蔵の『学習院一覽』（昭和12年）に付された構内図（報告書16頁）と、施設課所蔵「85周年記念建物敷地及び周辺地区地図（1963年）（同17頁）を重ねるまでで終わり、前者・天覧台と思われる地点が北1号館基礎工事と重なるほどに接近していたこと、碑の位置は現在とほぼ同じあたりであったのではないかと、いずれも推測するにとどまってしまった。とりわけ桜の木については、どこに植えられていたのか、あるいは北一号館通路の正門側にある古木が「桜の若木」に由来するのかどうか、施設課の記録等でも確認できず、なんとも心残りである。

報告書に収めた瀬川昌久（1943年卒）氏の写真の中に、高等科1年で不慮の死を遂げた三井高元氏を



図1 三井高元氏を追悼して（瀬川摩里子氏提供）



図2 山梨勝之進院長訓話

追悼し、父高公氏より寄贈されたアンツーカー・コート
の完成記念式典を写した一枚がある（報告書325
頁）（図1）。しかしここも、現在のどの地点を指す
のか不明のままである。『学習院一覽』構内図には、
現在のテニスコートと、ミュージアム正面が、テニ
スコートと書かれている。戦時期には現体育館の場
所にもテニスコートがあったとされる（島津忠美常
務理事からの助言）。昌久氏は2021年に逝去された。
もう二年早くおたずねしていたらと、残念でならな
い。

2025年12月5日、杉溪一言氏が、お二人のご息女
と研究室にみえられた。氏には、木場日記に登場す
る「東京パン」の位置を教えていただいた（報告書
265頁の手書きイラスト）。その時は、構内にあった食
堂で、高等科教員たちと食事をされた思い出を話さ
れた。この場所も、確認できないままである。

天覧台も、碑の位置も、桜も、そしてテニスコート、
学食と、学習院の歴史を伝える貴重な場所は、いた
る所に影を潜めている。学習院なればこそ、である。
学習院のキャンパスに、これからさらに多くの表象
が設置され、説明板がおかれ、学生たちが自然に歩
みを止め、訪問者が学習院の歴史を体感する散策の
場となることを、願いたい。

如何なる場合に於ても學問を離るべからざるべし （1945年1月1日院長訓示）

『輔仁会報』2号は手書きの回覧冊子である。学習
院百年史には、「第二号を見ることはできなかった。」
（『学習院百年史 第二編』、207頁）とある。しかし、
「四月十三日の空襲」と「五月二十五日の空襲」で
二度も印刷所が焼けたあと、それでも高等科の学生

たちは刊行を諦めず、灰となった原稿を復し、手書
きの回覧雑誌として発行されていたのである。

冊子に記された「目白が丘通信」（昭和十九年
十一月より昭和二十年七月迄の記録）には、新年拝
賀式（昭和20年1月1日）の山梨勝之進院長の訓話が
記されている（図2）。山梨院長は、「學問に就いては、
學問は學徒たる者の誇りなれば如何なる場合に於て
も學問を離るべからざるべしと論ぜられた。」と語
りかけたのだという。敗戦の年、死を意識した学徒
を前にしての「學問は學徒たる者の誇りなれば」の
言は、ことのほか重い。

「1月3～10日 此の間、特甲幹入隊の諸兄相繼い
で出發せらる。寒月冴ゆる暁の新宿駅頭に、夕靄迫
る上野駅の廣場に我々の兄は莞爾として出で立たれ
た」。このような、校舎の内外で日常的に挙行され
た出陣学徒の壮行会の様子も記録されている。本報
告書には渡邊忠三郎氏（1948年卒）所蔵の写真を多
く掲載しているが、その渡邊氏についても、「3月23
日 理科學生 渡邊忠三郎君 海軍豫備生徒として
出陣せらる。壯行式あり。」（「目白が丘通信」と記
されている。『輔仁会報』2号は、1945年7月15日発
刊とある（編輯後記は7月24日）。筆者は寡聞にして
この日時に発行された校友会雑誌を他に知らない。
輔仁会報の2号がアーカイブズに寄贈され、保存さ
れていた奇跡に感謝したい。

詮無いことだが、学徒出陣の研究を主旨とする説
明が、当初、資料提供の幅を狭めてしまったようで、
後悔している。同窓生の皆さんのご家庭には、戦時
期から1950年代にかけての写真が、残されているは
ずである。筆者は学習院を去るが、これからの取り
組みに期待したい。

安倍能成と学習院「教育委員会」

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

安倍能成への注目

2025年12月20日、研究集会「京城の能成、東京の能成一（安倍能成日記）から見えてきたもの一」（主催：安倍能成日記研究会、科学研究費・基盤（C）「京城時代の安倍能成」）が、東京大学駒場キャンパス1号館にて開催された。安倍能成は1926（大正15）年から1940（昭和15）年まで京城帝国大学教授・同法文学部長をつとめ、その時期の日記が愛媛県生涯学習センターに所蔵されている。研究集会は、進行の永島広紀九州大学教授による趣旨説明に始まり、続いて高田里恵子桃山学院大学教授の基調講演「安倍能成、『正直』と『いい加減』のあいだで」、研究会メンバー5名による報告、総合討論と約5時間にわたり続いた。かつて安倍が校長をつとめた旧制第一高等学校の教室だった会場は、最初は暖房が不十分だったものの熱の入った諸報告で盛り上がり、安倍に関心を寄せる人々が現在も健在であることに新鮮な驚きを感じた。

本紙第25号に『『雑文家』としての安倍能成』を掲載したこともあって、筆者は総合討論の際にコメントを求められた。愛媛県生涯学習センターの安倍能成資料については調査の経験があったが、学習院長としての一面しか見てこなかった筆者にとって、戦前の安倍の活動に関する知見は皆無である。研究報告は初めて知る内容ばかりで、京城時代の日記も存在は知っていたが見たことはなかった。コメントといっても院長時代の安倍の事績をいくつか挙げることはできなかつたのだが、本稿では学習院アーカイブズ所蔵「教育委員会記録」を紹介することでその補足としたい。安倍が院長（私学では一般に理事長）として私学になったばかりの学習院の経営再建に苦心を重ねると同時に、新たな教育理念の創出にも多大な貢献を果たしたことを示す資料だからである。

「教育委員会」における議論

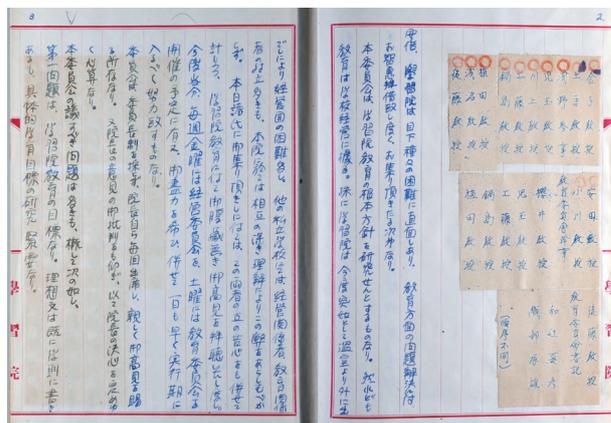
財団法人学習院が発足した1947（昭和22）年9月、「学習院教育の根本方針を研究せんとする」ことを

目的に教育委員会が設置された。「教育委員会記録」はその速記録で、すでに『学習院百年史 第三編』（1987年）や『学習院大学五十年史 上巻』（2000年）に引用されている。委員は学習院出身者・教員や学外の学識経験者など45名で構成され、委員長は置かれず安倍院長が進行役を務めた。

9月13日の第1回委員会において、安倍は議論すべき問題として、①学習院の教育目標、②新学制の実施、③校地分散問題、④男女共学問題、⑤財政問題、を挙げた。第1回では教育目標および新制大学の構想が話題となり、各委員から意見が述べられた後、安倍が次のように発言している。

学習院の伝統とは何か、美風とは何か、将来も之を維持する要ありやを考ふること、最も緊要なり。（中略）皇室中心なりし学習院は、既に実質的存在意義を失ひたり。一まつ閉鎖すべきなり、とする意見は、本院出身者間にすらあり。この際根本的にして且つ無遠慮なる反省を要するは明なり。美辞を徒に連ぬとも、学習院の起死回生は成らず。例へば、“上品”の問題にしても、更に深く反省すれば、当然従来の举止動作挨拶口上等の上品さを排して、より高き人格の上品さを要求すべきに非ずや。（中略）

誠に畏多けれど、皇室の方々には、他人に奉仕する精神の尊さに御理解少く、他人の奉仕の価値にも御理解少し。その流をひく華族階級の子弟を中心と



「教育委員会記録」

せる本院の生徒には、多分にその傾向有り。今にして強き反省無くば、やがて禍を来すべし。

又、学習院生徒には他人を見て兎角批判する明はあれど、自らを見て反省すべき明は乏しく、この荒々しき時代に何としても学習院を守り通さんとする意力も乏し。

人格的上品とは、右の諸欠点の反省の上に樹立せらるべきものなり。育ちの良さに由来する上品さは、浅くはかなく、反省の上に立つ上品さは、深くして不易なり。

初等科より大学までの一貫教育には利点も多きも、ところてん式の進級は安易に墮し易し。華族階級の生活のイージー・ゴーイングを却って助長する点も有り。大学教育を当然受け得べき者も、義務教育を受くるにかつかつなる者も、共にづるづると大学を卒業するは真に笑止なり。受験制度にも、かゝる点を是正すべき美点あり。

上述の私の意見に、御意見を賜りたし。

安倍は従来の学習院学生や皇族・華族に率直な批判を加え、組織制度だけではなく「精神の改革」を求めていた。「ところてん式」の単純な一貫教育についても、齒に衣着せぬ批判を続け、学生に対しても「この荒々しき時代に何としても学習院を守り通さんとする意力も乏し」と容赦ない。安倍が現状に齒がゆさを感じていたことが見て取れる。

1週間後の9月20日に開催された第2回委員会では、大学におけるリベラル・エデュケーションの重視が議論となり、安倍は、新設すべき大学の学科その他の細目を審議し、計画案を作成するための小委員会の設置を提案した。計画案は10月11日の第3回教育委員会に「学習院大学科設置要項」として提出され、作成にあたった櫻井和市教授から説明が行われた。安倍はこの回をもって教育委員会の最終とし、委員への謝意と共に、今後は学習院内で教育目標や大学構想を検討することを伝えた。この要項が、その後の検討を経て、1948年7月に文部省へ提出された「学習院大学科設置認可申請書」にまとめられていく。

「東洋学」への関心

教育委員会での議論を踏まえ、安倍は学習院の教育方針と開設する大学の構想を、第3回委員会の4日後の10月15日の理事会において報告を行った。院全体の教育方針が述べられる中で、教育委員会には示されなかった「東洋学」への言及が登場する。

本院教育ノ方針トシテハ、教養アリ確固タル識

見ヲ持シテ、人類ト国家ニ奉仕スル人物ヲ育成スル。

次ニ特色トシテハ、國際的ニ活動スル人間ヲツクル。國際的トハ従来主トシテ欧米ヲ指シテキタガ、コレカラハ欧米ノ外中国トモ密接ニ交流スル必要ガアル。日本文化ノ根柢タル中国文化ヲ研究スルト云フ特色ヲ加ヘル。ソノ意味デ東洋学ヲ大イニ研究セネバナラス。

自由ニノビノビシテ、自己ノ好ムトコロニ従ヒ、学問ニ対スル興味、真理ニ対スル愛ヲ深メ、同胞ニ奉仕シ、人ヲ批判スルノデナク、自己ヲ反省シ、又自ラ人ニ奉仕スル精神ト勤勞ヲ尊重スル觀念ノ養成ニ重キヲ置キタイ。ソウ云ツタ方向ニムケテ行キタイ。

コウ云フコトヲ中外ニ宣明シタイト思ツテキル(『学習院大学五十年史 上巻』、下線引用者)。

「東洋学」は、こののち大学設置認可申請書や「学習院大学設立趣意書」(1949年)などで繰り返し述べられ、『輔仁会雑誌』173号(1950年)の巻頭に掲載された安倍能成「さし向きの願ひ」には、「学習院大学を東洋文化研究の淵藪とするのが、私の夢であり、事情のゆるす限りは、少しづつでもその用意をしてゆきたい」とある。安倍の思いは1952年の学習院東洋文化研究所(現 学習院大学東洋文化研究所)設立につながり、同研究所は『李朝実録』普及版の刊行を実施した。資料での確証は未だ見出せていないが、安倍の「東洋学」への関心は、京城帝国大学時代の朝鮮での日々から発しているのではないか、というのが今回研究集会に参加しての筆者の推論である。

1947年、朝鮮史研究の第一人者である末松保和が学習院教授に就任し、学習院図書館長とともに東洋文化研究所主事をつとめ事業を推進した。末松は京城帝大法文学部に1935年から在職し、ほかにも不破武夫・麻生磯次など京城帝大時代の同僚が戦後学習院に着任し安倍を支えている。常務理事として学習院の経営を支えた水田直昌は、朝鮮総督府の財務局長をつとめていた。「京城時代の安倍能成」研究の進展によって、戦前の安倍と戦後の学習院長としての安倍を比較し、連続する点・変化した点を確認できるのではないかと期待している。

受け継がれる学習院女子大学の記録

—資料移管の概要—

学習院アーカイブズ 小根山美鈴・高田 礼子

1. 移管に至る経緯

学習院女子大学および同大学院（以下「女子大」という。）¹は、学習院大学・同大学院に統合され、2026（令和8）年4月より「国際文化交流学部」「国際文化交流研究科」として新たな一歩を踏み出す。この節目に先立ち、女子大と学習院アーカイブズとの協議を経て、同大で収蔵・管理されてきた多様な資料群が、前年度をもって学習院アーカイブズへ移管されることとなった。本稿では、女子大の資料を学習院アーカイブズが受け継いだことを示すとともに、資料群の全体像に触れ、その中から数点を紹介する。

学習院女子大学は、1950（昭和25）年に学習院大学短期大学部として開設され、1953（昭和28）年に学習院女子短期大学と改称、1998（平成10）年に女子大学に改組された。女子大は歴史ある学習院女子中・高等科（女子部）に続き、戸山にキャンパスを構えた。その教育実践は、学習院大学と共通点を持ちながらも、独自の理念や制度、空間的環境のもとで培われてきた。

2. 資料群の全体像

今回移管された資料は、学習院女子大学収蔵資料管理運営委員会によって管理されていた資料群で、340箱以上におよぶ。短大史編纂時代に作成・収集された資料を土台に、授業で使用された教材や、教員の指導方針を読み取れるノート類といった教育関連資料が中心を占める。他方、女子大改組時の学内運営に関わる教員側の事務文書も一定量含まれており、教育活動を支えた制度的基盤を把握する上で重要な資料となる。女子大の教育・研究面双方がバランスよく構成された資料群といっても過言ではないだろう。

続く資料紹介を通じ、これらの資料がどのような営みや背景のもとで生まれ、用いられてきたのか、その一端を見ていただければと思う。

3. 資料紹介

(1) 土曜散歩

「土曜散歩」とは、短大時代に教職員と学生の親睦を深める目的で開催されていた行事である。年に数回、土曜日の午後に都内や東京近郊の名所旧跡巡り・教育文化施設の見学などを行っていた。

当資料群は、土曜散歩を主催していた短大時代の学生部によって作成された。行程表、ポスター・チラシ類（図1）、参加者名簿、経費計算書類など約180点からなり、年代は1983～1986（昭和58～61）年と1989～1997（平成元～9）年の二期に分かれている。

行先の一例を挙げると、上野、浅草などの下町巡り、六義園、出光美術館、日本近代文学館、江戸東京博物館、サンシャインプラネタリウム、しながわ水族館などがある。横浜や川越に足を伸ばしたこともあった。また、能楽や落語の観賞、大相撲観戦、新聞社見学、外国人による日本語弁論大会の聴講、バードウォッチングなども企画された。1990年代には臨海副都心や完成したばかりの東京都庁の展望室を訪れており、行先から当時のトレンドも垣間見える。参加学生数は各回概ね20名前後で5～10名程度の教職員が引率し（図2）、毎回オプションとして二次会（コンパ）が設けられていた。

短大のアットホームな雰囲気が窺えるとともに、2年間という短い学生生活の充実を図るために行われた取り組みの一端を知り得る資料である。

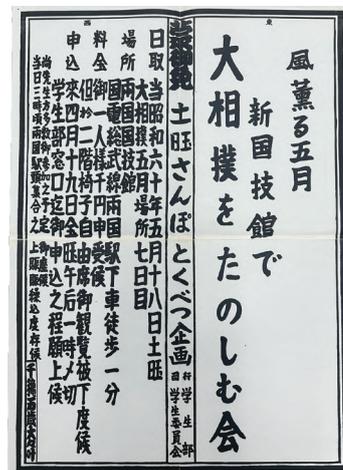


図1 参加者募集のポスター



図2 土曜散歩引率時に使われた旗

(2) 近衛騎兵連隊関連資料

女子大および女子部のある戸山キャンパスには、かつて近衛騎兵連隊が置かれていた。現在も当時の兵舎が女子大学4号館・女子部B館（以下「4B館」という。）として、炊事場・浴場が女子部C館として、それぞれ使用されている。かかる前史ゆえ、近衛騎兵連隊に関する資料が複数の資料群にわたって約230点収められている。短大史編纂時に収集されたものがその根幹をなすと思われ、内訳は概ね下記の通りである。

① 写真・アルバム類：約145点

近衛騎兵連隊出身者から寄贈されたものが大半を占めると思われる。連隊各所の風景や建物、兵舎内部の写真などがあり、戸山キャンパスの変遷を知る上で貴重な資料である。これらの写真はデータベース化され、2010（平成22）年に女子大によって『学習院戸山キャンパスの記憶—近衛騎兵連隊時代—』と題する写真集が発行された。他に大正期に発行された連隊の絵葉書などがある。

② 4B館建築部材：19点

過去の改修工事の際に撤去されたもので、小屋組の金属部材、建物内部の天井飾り、瓦、煉瓦などがある。煉瓦の中には刻印の入ったものがあり（図3）、摩耗のため判読は難しいが、「上敷免製」と刻印されている可能性がある。その場合は、現在の埼玉県深谷市上敷免にあった日本煉瓦製造株式会社（1887〈明治20〉年設立）の工場で製造されたものとなる。いずれの部材も兵舎として使用されていた当時のものであり、建築学的にも価値の高い資料と考えられる。

③ 近衛騎兵連隊時代の残置物：7点

2021～2023（令和3～5）年に実施された4B館耐震補強工事の際に、床下や天井裏などから発見された。飯盒・略帽・拍車などの装備品と、兵

士が親戚に宛てて書いた未投函の葉書、大日本国防婦人会の襷がある。

④ 建物調査記録報告書他：約40点

過去に実施された4B館およびC館の建物調査記録報告書など。2009～2011（平成21～23）年に、建物の価値を確認するために実施された調査と、前述の耐震補強工事に先立って2019（令和元）年に実施された調査の記録報告書がある。後者は、2021（令和3）年に『赤レンガ校舎の軌跡—学習院戸山キャンパス4B館—』として発行されたⁱⁱ。

⑤ 近衛騎兵連隊に関する刊行物：約15点

連隊出身者による文集や回想録、写真集など。

以上の資料の大半は直接学習院に関わるものではないが、近衛騎兵連隊の跡地をキャンパスとしている者として、これらを大切に受け継ぎ後世に伝えたい。

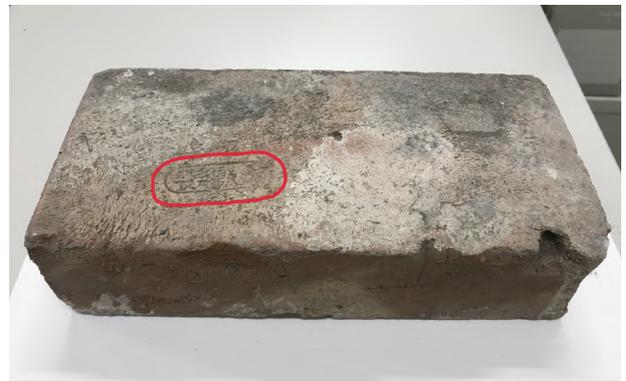


図3 刻印のある煉瓦。赤で囲った部分に刻印が見える

4. 今後の展望

現在、女子大移管資料は戸山キャンパスの収蔵庫に収められている。本格的な資料整理がこれから始まるため、利活用の段階に至るまでにはもう少しお時間をいただきたい。女子大の歴史が制度的には幕を閉じる一方、統合後の新たな枠組みへと移る過程の中で、学習院アーカイブスが「確かに受け渡された」存在であることをあらためて確認する機会となれば、本稿の意義は果たされるだろう。

i 女子大および短大時代の活動や歴史については、次の文献が参考となる。
 ・『三十年』（学習院女子短期大学、1981年11月）
 ・『半世紀 学習院女子短期大学史 図録』（学習院女子短期大学史編纂委員会編、学習院女子大学・女子短期大学発行、2000年3月）
 ・『半世紀 学習院女子短期大学史 通史・資料編』（学習院女子短期大学史編纂委員会編、学習院女子大学発行、2003年3月）
 ・『新しいリベラルアーツ教育の構築—学習院女子大学の挑戦—』（内野儀・金城亜紀編、信山社、2023年3月）
 ii 学習院女子大学 学芸員課程委員会・収蔵資料管理運営委員会編集・発行

主な活動（2025年7月～2026年1月）

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②非現用文書ファイルの評価選別（24部署）
- ③各部署に保管されている評価選別済保存文書の移管（2部署）
- ④文書管理に関する支援

◆学内各部署に保存されている資料の調査・整理

- ①幼稚園事務室資料
- ②女子大学収蔵資料管理運営委員会所蔵・管理資料
- ③総務部総務課資料
- ④大学図書館資料
- ⑤勅額（史料館収蔵）の3次元計測、色調調査、高精細撮影、色調確認作業（7月14～16日）



- ⑥勅額（初等科所蔵）予備調査



◆学外資料調査

- ①宮内庁書陵部図書寮学習院関係資料調査

◆所蔵資料の整理・保存

- ①移管文書の選別・整理・目録作成
- ②学内刊行物、書籍
- ③劣化資料に対する保存修復
- ④資料クリーニング

◆資料受入れ（受贈）

- ①学習院大学北二号館新築工事設計図、学習院大学北別館内部改修工事図面
- ②生物部資料

◆資料等のデジタル化

- ①「式事録」（昭和10年代分）のデジタル化および補修
- ②「規程」（昭和30～50年代）のデジタル化および補修

◆講演会、教育・広報支援等

- ①文学部教育学科専門科目「教育学・教育実践演習Ⅱ・Ⅲ」への協力（7月18日）
- ②総合基礎科目「記録保存と現代Ⅱ」への協力（10月24日）
- ③安倍能成日記研究会（科学研究費・基盤（C）「京城時代の安倍能成」）主催研究集会「京城の能成、東京の能成一〈安倍能成日記〉から見えてきたもの一」（12月20日）に参加

学習院アーカイブズ・ニュースレター第26号
2026（令和8）年2月17日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285（直通）

事務室 北別館

<https://www.gakushuin.ac.jp/houjin/archives/index.html>